

事業完了報告書（橿原市）

調査研究期間等

| 調査研究期間 | 委託を受けた日 ～ 令和7年3月15日 | | | | | | | | | | | | |
|----------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------|-------|--------|---|---------------|-----------------------------|---|--------------------------------------|----------------------------------|---|--------------------|--------------------------|
| 調査研究事項 | <p>≪委託研究：夜間中学における教育活動充実に係る調査研究≫</p> <p>IV. その他夜間中学における教育活動充実に関すること</p> <p>①生徒のもつ課題を学校組織で捉え、スクールカウンセラー（SC）（スクールソーシャルワーカー（SSW）も兼務可能な人材）との協働によりすべての生徒の学習保障のための持続可能な取組の構築を図るための調査研究をおこないたい。</p> <p>②生活が困窮している生徒の経済的な負担を軽減することで、校外学習への参加を促し、「学び」の一環として生徒自身が個々の特性や能力に応じて、市民と協働しながら校外学習の企画を主体的におこなう仕組みをどのように構築できるかについて調査研究をおこないたい。</p> | | | | | | | | | | | | |
| 調査研究のねらい | <p>① について</p> <p>〈今年度の重点目標〉</p> <p>A 心身に不安をもつ生徒に適切な教育相談を行い、生徒自身が主体的に自分自身と向き合い学習に取り組めるよう支援する。</p> <p>B 生徒の居住地の小・中学校との連携を図り、生徒理解を深め、生徒の教育環境の整備を行う。</p> <p style="text-align: center;">* 上記A・Bを学校組織の課題として取り組む。</p> <p>〈現状について〉</p> <p>▶生徒の面談等による実態把握から</p> <p>表①</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; margin-top: 10px;"> <thead> <tr style="background-color: #d9e1f2;"> <th style="width: 10%;">項</th> <th style="width: 45%;">生徒の実態</th> <th style="width: 45%;">詳細について</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="text-align: center;">1</td> <td>高齢で一人暮らしをしている</td> <td>高齢の一人暮らしで孤独感や生活についての不安感が大きい</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">2</td> <td>生活のための日本語がよくわからず社会や人との関わりが制限された状態にある</td> <td>日本語がよくわからず社会や人との関わりが制限され不安な状態にある</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">3</td> <td>夜間中学への登校がしにくくなっている</td> <td>夜間中学で思うように学習が進まずあるいは教員との</td> </tr> </tbody> </table> | 項 | 生徒の実態 | 詳細について | 1 | 高齢で一人暮らしをしている | 高齢の一人暮らしで孤独感や生活についての不安感が大きい | 2 | 生活のための日本語がよくわからず社会や人との関わりが制限された状態にある | 日本語がよくわからず社会や人との関わりが制限され不安な状態にある | 3 | 夜間中学への登校がしにくくなっている | 夜間中学で思うように学習が進まずあるいは教員との |
| 項 | 生徒の実態 | 詳細について | | | | | | | | | | | |
| 1 | 高齢で一人暮らしをしている | 高齢の一人暮らしで孤独感や生活についての不安感が大きい | | | | | | | | | | | |
| 2 | 生活のための日本語がよくわからず社会や人との関わりが制限された状態にある | 日本語がよくわからず社会や人との関わりが制限され不安な状態にある | | | | | | | | | | | |
| 3 | 夜間中学への登校がしにくくなっている | 夜間中学で思うように学習が進まずあるいは教員との | | | | | | | | | | | |

| | | |
|---|---------------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| | | 関係がうまくいかず学習意欲をなくしたり、夜間中学に在籍し学習を継続することへの意義をあまり感じられてない |
| 4 | 学齢期に不登校を経験したことがある | いじめや家庭環境が原因で学齢期に不登校を経験したことや、職場の中での人間関係がうまくいかないことで、心に不安があり自立した生活ができず将来への不安が大きい |
| 5 | その他(一人親家庭・生活保護家庭など) | 家庭の経済状況・子育て・仕事などについて生活に不安をもっているなど |

▶アセスメントシートから

表①をもとに37名(年度途中の除籍者を含む)の生徒のアセスメントシートを作成した。但し:複数回答あり(年度途中入学者3名・体験者3名も含む)

表② *参考:本学級生徒数 女性 29 男性 8 合計37

| 項 | 女 | 男 | 計 | 年代別人数(他) |
|---|----|----|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 | 2 | 0 | 2 | 70代2名 |
| 2 | 23 | 8 | 31 | 70代4名・60代5名・50代5名 40代11名・30代5名・20代1名 |
| 3 | 2 | 1 | 3 | 60代1名(男性1名)・50代1名・30代1名 |
| 4 | 5 | 1 | 6 | 70代2名(男性1名)・40代2名・30代1名 20代1名 |
| 5 | 12 | 5 | 17 | ・一人親世帯6名 女性30代1名 40代4名 男性30代1名 ・高齢者6名 男性70代2名 女性70代3名 90代1名 ・生活保護家庭1名 40代女性 ・療養中5名 女性40代50代各1名 70代2名 男性20代30代70代各1名 |
| | 44 | 15 | 59 | |

▶課題となる実態(表②と教育相談から)

- a 全ての生徒が1~5の項目にあてはまり、そのうち複数の項目にあてはまる者が全体の半数いた。(37名中)
- b 70歳以上の生徒が6名いるが、内4名が持病をもち定期的に通院している。その他2名は外国ルーツの生徒で通院等には通訳等支援が必要である。また、60代2名 40代2名 30代1名 20代1名現在通院中(精神科を含む)である。
- c 子育て世代が8名いるが、その中の7名が外国ルーツであり、内

6名は複数の悩みを持っている。また、2名(日本人1名)は子どもが不登校傾向にある。

d 学び直しの生徒が6名いるが、特に5名は学校に対する不適応を感じ不登校となった経験を持ち、専門家による心のケアを必要とする。

e 今年度入学予定者の中に、今春中学を卒業する生徒が2名いる。2名とも不登校を経験し学校不適応の課題をもつ生徒である。

以上が、本学級の生徒の実態ですが、さまざまな課題をもつ生徒の支援に関して、組織的に取り組むことと外部の関係機関との協働を進めていきたいと考えます。

具体的には上記のうち、dについてはその高い緊急性から昨年度から本委託事業予算を活用しSCを配置し、組織的に取り組む体制づくりを進めてきました。今年度は、昨年度取り組むことができなかった上記bとc、そしてdの生徒への継続した支援の在り様についてアセスメントを進め、心のケアと暮らしのケアの両面からの支援について臨床研究を進めていきたいと考えます。

②について

昨年度の調査研究事業では、生徒がコロナ禍のために経済的に困窮していることに加え、物価の高騰も相まって、参加費用の自己負担が大きい学校行事への参加が難しくなっている実態がある中で、生徒の経済的な負担を軽減しながら、夏の校外学習を活用して生徒と市民が交流しつながりを深めるための事業を実施しました。事業実施の結果、経済的に困難な状況にあり、費用の自己負担の大きい行事には、なかなか参加できなかった生徒が、一定参加することができ、市民の学校支援団体である「檀原に夜間中学をつくり育てる会」の会員とも自然な形で交流することができました。また、そのことが、地域に開かれた学校として地域市民とのつながりを深めるきっかけとなり、2学期に檀原市で実施した全国夜間中学研究大会での、「奈良からの発信」という形で、生徒・教員・市民・県境教育委員による共同発表にもつながりました。

今年度は、昨年度8月に実施した校外学習の取り組みを発展させ、「生徒の主体的・協働的学び」を推し進める方策として活用したいと考えます。生徒自身がそれぞれの特性や能力に応じて、市民と協働しながら、校外学習の企画を主体的におこなう仕組みをどのように構築できるかについて調査研究をおこないたいと考えています。

具体的には、教員のコーディネーターを決定し、昨年度生徒との関係を深めた市民団体「檀原に夜間中学をつくり育てる会」の役員の皆さんに協力をお願いしながら、生徒会役員を中心に生徒自身が、「檀原に夜間中学をつくり育てる会」の役員の皆さんと以下の

| | |
|---------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>ようなプロセスを協働しながら、企画運営をおこなっていくことを想定しています。それらの作業を通じ、ICT機器の活用も含めて、生徒会の役員のそれぞれの特性や生活や夜間中学での学びの中で習得したスキルを個々に合わせた役割分担の中で発揮し、課題を解決することが期待されます。</p> <p>【交通手段の確保・バス会社との連絡調整・利用施設の予約・利用施設との連絡調整・生徒と市民への参加呼びかけ・当日の活動企画と工程調整・活動内容の発信・事後評価等】</p> <p>そして、単に教員が計画した行事に受動的に参加するのではなく、生徒自身が、主体的にその特性や人生経験の中で身に付けてきたスキルを発揮しながら、市民と協働することで、結果として、それぞれの生徒が達成感や自己有用感を得ること、また、そのことが、市民と地域社会との相互理解の深化につながることを期待します。</p> <p>また、冬の校外学習では、経済的な負担と冬の厳しい気候という条件が重なり、例年参加が非常に少ない近畿夜間中学連合作品展への参加にあたり、生徒の経済的な負担を軽減する中で参加者の増加を図りたいと思います。そして、その上で、夏の校外学習での学びを活かし、以下の行程を生徒会の役員が、個々の特性やスキルを発揮し、生徒同士の協働によって、主体的に実施していくことを目指したいと考えます。実施に当たっては、生徒会担当教員が生徒会の役員の相談役にあたり、以下の活動を主体的に生徒自身が実施できるようアドバイスとその仕組みづくりを心がけます。</p> <p>【交通手段の確保・バス会社との連絡調整・展示作品の作成と展示レイアウト・生徒への参加呼びかけ・当日の行程作成と調整管理・事後の評価】</p> <p>この活動においても、生徒自身が社会とかかわり、校外学習実施に至るそれぞれの段階の課題を協力して考え、個々の特性やスキルを活かしながら解決していくことで、夜間中学生として校外の社会とつながりを持ちながら、学校の日々の営みを主体的に作っていく気持ちと行動力、そして、自己達成感や自己肯定感を得ることを期待します。</p> |
| 調査研究の成果 | <p>① について</p> <p>事業計画に従い、以下の取り組みをおこないました。</p> <ul style="list-style-type: none"> * 4月の職員会議で教育相談について取組を説明し、教育相談部を立ち上げコーディネーターを決定する。 * 6月の職員会議でコーディネーターより、SC 活用について意義・方法・評価方法・成果の発表方法について提案し検討する。 (別紙1) 職員会議資料 * 各担当教員によってアセスメントシートの確認と変化・変更等合 |

った部分の書き換えを行い、コーディネーターが集約する。

- * 市教委がハローワークを通じて SC を公募し、市の会計年度職員として以下の通り雇用を開始する。(別紙2-①②)

7月～2月計16回、原則月2回、1回3時間

時給単価は橿原市適応指導教室「虹の広場」所属の SC と同額

■事業Aについて

- * 昨年度から引き続き「学び直し」の生徒を中心にコーディネーターによる調整のもと、カウンセリングを実施し、職員間の情報共有を図る。

a 準備;担当教員による相談前のアセスメントの作成

b カウンセリングの実施

c カウンセリング後の結果のフィードバック

(SC→担当教員・コーディネーター)

d 相談翌日の打ち合わせで、SCからの伝達内容を教員間で情報共有 (担当教員→全教職員)

・カウンセリング最終回、SC からコーディネーターに今後の対象生徒の対応についてのアドバイスを得る。

- * SC からのアドバイスを受け、生徒がかかる医療機関その他(以下)との連携を図る。

家族、キーパーソンとなる人、居住地の市役所(町役場)の関係課、福祉事務所等

- * SCを講師として高齢者および外国ルーツの生徒理解についての研修を企画し実施する。(別紙3) 研修資料

- * 2月末職員会議にて、取組の成果と課題を検討する。

■事業Bについて

- * 毎年実施している7月末から8月にかけての生徒の居住地教委訪問のときに、学齢期の子どもがいる生徒について説明し、その子どもが通う学校との連携について依頼する。(全教員)

- * 畝傍中学校と畝傍北小学校のSCに取組についてコーディネーターから説明し理解を求める。

- * コーディネーターとSCとの間で、両校に通う生徒の子どもについて把握し、互いの情報交流を月1～2回実施し、SCによる子どもの見守りを行う。

- * 橿原市以外の生徒の子どもについても可能な限り、コーディネーターが学校に連絡し交流を図る。

- * 2月末職員会議にて、取組の成果と課題を検討する。

【成果と課題】

■事業Aについて

〈成果〉

- * 校内教育相談部会(場合によっては拡大運営委員会等として)を開催し、教育相談を組織化した。

* 外国籍・高齢者・不登校経験者の理解を図り、共に学びを進めるために話を聴くということを考える研修(SCを講師として)を受け、個々の職員のスキルアップにつながった。

(別紙4) 研修振り返り

* SCからの専門的なアドバイスを受け外部の関係機関との連携を図る取組において、引きこもりを経験し、現在家でヤングケアラー的な状況を強いられている生徒の就職相談にあたって、関係団体等のアドバイスをもらい、対応を1歩前に進めることができた。また、発達障害、精神疾患をもつ生徒の入学にあたって・医療機関・支援チームとのケース会議の持ち方・生徒への見立て・生徒の対応にあたっての配慮等アドバイスをもらい受け入れ体制を整えることができた。

〈課題〉

* SCの配置に関して、月3回定期的な実施が望ましいと考える。理由は、本夜間中学の実態として、生徒の登校時間がそれぞれ異なることと、特にカウンセリングを必要とする生徒の登校状況がよくないことが挙げられる。また、1回約1時間のカウンセリングでは対象者の数が限られ、カウンセリングを希望する全ての生徒に対応することができなかった。

〈設定した指標による評価〉

- ① 該当する生徒の登校日数が今年度よりも増える
→増えた生徒3名 減った生徒1名
- ② 教育相談が定着生徒の認知度が高くなる
→高くなった(生徒の声から)
- ③ 教員の力量の向上し、適切な生徒理解ができる
→共通理解を図り、どの教職員も適切な対応に努めている。

〈指標に対する結果からの考察〉

定期的なカウンセリングが受けられる環境があるということで、SCや教員の側は先を見通した中で今、しなければならないことを認識することができ、生徒はまた聞いてもらえるという安心感をもつことができました。出席日数が減った生徒については、SCによるカウンセリングと専門的な知識をもつ教員による個別の対応を長いスパンで行っていく必要があると思われます。

教育相談の定着という点では、十分効果があったと考えます。実際、現在対象としていない生徒からも相談について質問されるケースが複数あります。SCがいることが、安心した学びの環境づくりにつながっています。

教員の生徒理解に関しては、研修等を通してその認識が深められたと考えられます。また、一人で悩まず情報を共有し、学校組織として共に考えていくという持続可能な体制が確立してきたと言えます。

■事業Bについて

〈成果〉

- * 生徒の居住地の小・中学校との連絡を実施した。外国ルーツの家庭で子どもの様子を心配する生徒の声を子どもの担任に伝え、子どもの学校での様子を聞き生徒に伝えた。子どもの担任も保護者とのコミュニケーションに困っているという状況にあったことがわかり、生徒も担任の先生からの話を聞くことができ安心した。
- * 一人親世帯のお母さんが仕事で、子どもが一人になることが多く、生徒も中学校の担任の先生も心配している状況があった。夜間中学の担当教員が間に入ることで、子どもの緊急時の対応等における心配が解消した。また、SCを通して常に子どもの学校での様子を知り保護者である生徒にも伝えることができた。

〈設定した指標からの評価〉

- ① 該当する生徒の登校日数が今年よりも増える
→ 生徒さんの登校日数には変化はない
- ② 生徒の居住地の学校との連絡件数が増える
→ 増えた。
居住地教委との連絡が増えた
→ 増えていない
- ③ 教員の力量が向上し、適切な生徒理解ができる
→ 情報を得ることができ、生徒理解にもつながった

〈指標に対する結果からの考察〉

生徒の子どもが通う学校との連携は、生徒にとっては学校に来ることにつながるわけではないことがわかりました。もとより、学齢期の子どもをもつ生徒の多くが30代から40代で家族の生活を支え、仕事が優先される年代だったということに改めて気づかされました。しかし、そのように忙しい中でも子どもの学校からの便りを手に学校に来る生徒の声の切実な思いを痛感しました。

生徒の居住地の小学校・中学校(以降、学校)との連絡が増えました。このことは、教員が生徒を理解し何らかの子育て上の支援をする上で有効となります。また、居住地の学校の側からも保護者の状況を知ることには子どもたちを理解する上で大切なことだと考えます。本夜間中学の生徒の居住地は11の市町という広範囲にわたり、それぞれの地教委との連携は煩雑な状況にあり、まだまだ今回はすべてできていません。しかし、それぞれの生徒が生活する教育委員会に上記の認識を促すためにも、また何か問題があったら連絡をするのではなく、問題が起こらないようにするためにも、今後さらにやり方を考えて進めていかなければならないと考えています。

教員は情報を得ることができ、生徒理解につながりました。しかし、特に日本で生活する外国ルーツの家族が増えている中で、仕事・子育ては大きな問題です。今後さらにそのような家族が増え、

子どもの保護者である生徒が増えることが予想されることから、さらに、方法を考えてこのような連携を進めていくことが必要だと考えています。

②について

(1) 夏の校外学習（令和6年8月4日）について

●事前準備（7月）：

- * 教員のコーディネーターを決定。
- * 生徒会役員と市民団体「檀原に夜間中学をつくり育てる会」役員と実施内容のついての企画会議を実施。
- * 交通手段（民間マイクロバス）の確保、施設予約。
- * ICT機器の操作のスキル、日本語のスキルなど各生徒のスキルを活かした参加案内の作成及び参加呼びかけを実施。

●実施内容：（別紙5） 校外学習実施届参照

- * 生徒と市民団体が協働による校外学習の実施。
- * 森の自然を活かした体験型学習（ハーベキュー調理、スイカ割り、川遊び）を実施。

●実施後の振り返り（9月）：

- * 生徒会・職員会議で成果と改善点を検討。

〈成果〉

この校外学習は3つの具体的目的を立てて実施しました。

一つ目の目的は、「経済的に困窮している生徒の費用負担を軽減し、生徒の積極的な学校行事への参加を促す。」ことにありました。本校には、コロナ禍に起因する雇い止めやこの間の物価の上昇などで経済的に苦しい生活が続いている生徒が複数在籍しています。そして、その多くが生活自体が不安定で、通学のための交通費、生徒会費や学校行事参加にかかる費用等、自己負担が必要な費用の捻出が難しく、支払いができずに、学校の教育活動に十分に参加することができない状況がこの数年継続しています。そのため、昨年度に引き続き、今回の校外学習も施設利用料と交通費を文科省の研究委託事業費を活用し、生徒の経済的な負担を軽減しながら、できるだけ多くの生徒が校外学習に参加できるよう配慮しました。その結果、昨年度（9名）よりもさらに多くの生徒（17名）が参加でき、継続した事業目標の達成につながりま

した。

二つ目の目的は、「生徒と地域市民が、黒滝村の自然の中で一緒に活動し、直接交流をすることで、市民の夜間中学理解と学校と市民のつながりをさらに深める。」ことでした。普段学校の教育活動に協力いただいている地域市民の団体である「榎原に夜間中学をつくり育てる会」（以下育てる会）の会員の皆さんと参加生徒、特に今年度の新入生である外国籍の生徒が同じ席でともに調理をし、調理したものを食しながら、出身国の話や日本での生活の話、育てる会の活動の話をしなが、積極的に交流する姿が見られ、つながりを深めることができたことは大きな成果です。

また、三つ目の目的は、「生徒会を中心に生徒自身が育てる会役員と実施について協働し関係を深めながら、それぞれの持っているスキルを発揮することで自己肯定感を高める。」ということでした。これらの目的については、今年度は、育てる会の会員の皆さん、11人に参加いただくことができました。育てる会会員の皆さんに、特に役員3名の方々には、今回の校外学習の計画実施にあたり、生徒会の役員と話し合いを持ち、生徒会と協働しながら、準備（調理と会食のための消耗品、食材の買い出し等）と当日の役割の分担をしていただくことができました。昨年度も、当日の調理作業を協働でおこない、できあがった物を共に食しながら、参加者同士が立場を超えて、つながりを深めることができましたが、今年度は、それにも増して、事業自体を協働で実施することで、普段の机の上の学習だけでは見られない、生徒会の役員個々の能力が、育てる会の役員さんたちとの協働の中で発揮され、生き生きと生徒が活動する場面が多くありました。食材や調理準備物の購入数の決定や品物の選定など、生徒が積極的に意見を出し、育てる会の役員さんとともに実際の購入作業にあたり、学習したICT機器操作のスキルを活用し、参加のためのチラシを教員といっしょに作成し、参加の呼びかけをおこなったりと、これまで教員が中心となって担ってきた活動を生徒自身がおこなうことができ、設定目標も一定達成することができました。

(2) 冬の校外学習（令和7年2月9日）

●事前準備（7月～1月）：

* 7月～11月：展示作品を作成。

* 12月～1月：

生徒会役員とコーディネーター役の教員が相談をし、展示レイアウトを検討。また、生徒会担当教員とも相談し引率計画を作成。生徒会役員による参加案内の作成及び参加呼びかけを実施。

●実施内容：（別紙6） 校外学習実施届参照

- * 各自の作品を展示。
- * 他校の生徒と交流し、作品の相互鑑賞を実施。
- * 生徒集会への参加及び大阪暮らしの今昔館見学実施。

●実施後の振り返り（2月）：

- * 生徒会役員による校内参加報告会の企画実施。

〈成果〉

この校外学習は4つの具体的目的を立てて実施しました。

一つ目の目的は、昨年度から継続し、「経済的に困窮している生徒の費用負担を軽減し、生徒の積極的な学校行事への参加を促す。」ことにありました。事業実施当日2日前からの寒波と降雪の影響があり、体調を崩す生徒が多く、当日参加できたのは14名となりました。しかし、参加申し込み時点では、昨年の参加者を超える19名の参加申し込みがありました。参加の申込者が、少数ではありますが、昨年度より2名増えたことは、目的が一定達成できたと考えます。

二つ目の目的は、「近畿圏の夜間中学生が授業で作成に取り組んだ作品を見学しあったり、各校の日々の学びの様子を交流しあったりすることで、互いに知り合い、励ましあいながら、生徒同士のつながりを深める。」ということにありました。当日行われた生徒集会では、約300名近い近畿圏の夜間中学生が集まり、各校の様子や各個人の経験などの発表がありました。どの生徒の発表にも、懸命に耳を傾け、発表の内容を理解しようと努める姿や発表の内容について、「しんどい思いをしてきたのは、夜中生はみんないっしょだ。」と思いを共有するコメントを引率教員に話す生徒も見られました。また、作品展の見学でも、他校の生徒の習字や共同作品に書かれていた文字やその内容について、「この気持ちはよく分かる」というコメントを話す生徒や、「うちの学校でも焼き物を作る授業をしてほしい」と他校の生徒が作成した作品をヒントに今後学校で取り組みたい授業の内容を意欲的に教員に提案する姿、また、同じ出身国の他校の生徒と出会い語

り、連絡先を交換する姿なども見られ、十分に目的が達成したと考えます。

三つ目の目的は、「生徒会を中心に生徒自身が校外学習の企画にあたり教員と協働し、それぞれの持っているスキルを発揮することで、学校の日々の営みを主体的に作っていく気持ちと行動力、達成感や自己肯定感を高める。」ことにありました。また、年度当初の目的にはありませんでしたが、事前準備の企画の段階での生徒自身の発案で、「大阪くらしの今昔館を見学することで、大阪の庶民の生活の歴史を知り、時代と私たちの生活との関係について考えるきっかけにする」ということを追加した形で、事業を実施しました。生徒集会については、近畿夜間中学生徒会代表社会の中で、その運営の企画がなされて、その後、奈良県夜間中学生徒会代表者会議の中で参加の体制を生徒自身が話し合い、参加の呼びかけについても生徒自身が行いました。また、作品展の本校から展示作品の選択についても担当教員が生徒会役員の意見を聞きながら進めることができました。また、作品展参加についての生徒会の話し合いの中で、多くの生徒に参加を促すための方法が話し合われ、「せっかくバスを借りて大阪まで行くのだから、会場の近くでお金の掛からない場所で、大阪のことがよく分かる場所を探して、作品展の後で見学してはどうか」という意見が提案されました。その後、生徒会役員からコーディネーター役の教員に相談があり、インターネットのweb検索を使用しながら、生徒会役員の補助を行い、見学場所の決定、見学方法の決定等を、生徒会役員とコーディネーター役の教員が協働する形で行いました。当日の見学では、大阪の街と市民の生活の歴史にどの生徒も興味を持って見学し、見学しながら、引率教員に日本人の昔の生活や日本の経済発展などについて質問する姿が頻繁に見られ、当初予定していた一時間の見学時間を延長する結果となりました。また、事後の取り組みとして、校外学習の振り返りとして予定が合わず校外学習に参加できなかった生徒への周知も兼ねて報告会を実施しました。生徒会の役員と担当のコーディネーター役の教員が相談をし、校外学習当日に撮影した写真を選択し、パワーポイントにまとめ、提示しながら、生徒会役員を中心に校外学習当時の様子や感想を発表する機会を設けました。発表の場面では、教員が準備した原稿を読むということではなく、すべて自分の言葉で発表をする様子が見られ、それを聞く生徒も発表を聞いた

感想を言う様子もうかがえました。これらのことから、事業の目的は十分達成できたものと考えます。

〈②の取り組み事例についての考察・課題〉

上記のことから、これらの校外学習の取り組みでは、夜間中学生が経済的な負担を抑えながら主体的に学ぶ環境を整えることの重要性が再確認できたと同時に、生徒自身が企画・運営に関わることで、自己肯定感や社会とのつながりを実感し、学びへの意欲が向上に結びついていることも明らかにできました。

今後も、夜間中学の社会的意義に合致した継続的な教育活動の基盤を維持するためには、本調査研究の成果を活かし、引き続きさらに地域社会とのかかわりとつながりを深めながら、生徒がより主体的に教育活動に取り組める環境を整えていくことが課題だと考えます。